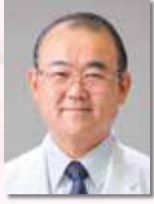


2024年(令和6年)2月22日

病院長からの一言 業務改善に向けて

弘前大学医学部
附属病院長 袴田 健一



2024年は、能登半島地震ならびに航空機衝突事故という2つの衝撃的な出来事で始まりました。災害は繰り返す、安全に絶対はないとの認識を職員の皆様と共有し、危機管理・BCPへの不断の備えと、人為的ミスの回避に向けた医療安全対策を実行に移したと思います。

さて、昨年来、診療科ヒアリングや病棟巡視を通じて、コロナ禍前後の医療ニーズの変化や今後の見通し、病床運用上の課題、職場環境の問題点など、様々な立場の職員の皆様から貴重なご意見を頂

戴しました。人員不足、非効率な業務(面会患者対応業務や入院業務の煩雑さ、医師ならび他部署との連携不良)、DXの遅れ(電子カルテシステムの課題、クリパス導入の遅れ)などの業務内容に関するもの他、駐車スペース不足や職員の食事・休憩場所の不足など、内容は多岐にわたります。抗がん剤治療を受ける小児患者が、体調の良い時に安全に食べられる「味が濃いめの冷凍食品」の自販機を病棟に設置してほしい、といった現場ならではの要望もありました。

これらのうち、駐車場問題や面会業務の改善には早期に着手できましたが、例えば看護業務の効率化には、看護師側の病棟毎の業務内容の見直しに加え、医師・薬剤部・中央診療部門の理解と協力が必須です。他職種の業務の効率化にも同様のことが言えます。さらに、診療科別・病棟別に縦割りとなっていた診療ルールは可能な限り共通化を図り、業務改善の利益が広く病院全体に行き届くよう情報交換の機会を増やす必要があります。最も根源的な課題である人員確保、電カルシステムの改修やDXには、原資確保のため運営側の経営努力が求められます。直ちに解決が難しい課題も多くありますが、取り組みを始めなければより良い明日はありません。私たちの社会的なミッションが果たせるよう、職員の皆様と智恵を出し合いながら、一步一步業務改善に向けた努力を積み重ね、動きやすい職場環境の構築を目指したいと思います。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

令和4年度ベストやまびこ賞, Good Approach賞, Good Job賞 表彰式を開催(8/22)



令和4年度ベストやまびこ賞, Good Approach賞, Good Job賞の表彰式を令和5年8月22日に執り行いました。

ベストやまびこ賞とは患者さんからの投書のうち感謝の投書が多い部署を表彰するもので、循環器内科/腎臓内科、第一病棟7階(現入院棟東4階)、栄養管理部の3部署が、Good Approach賞とはインシデント報告のうちレベル0の報告が多い部署を表彰するもので、内分泌内科/糖尿病代謝内科、皮膚科、第一病棟3階(現入院棟東3階)、手術部、放射線部・光学医療診療部、輸血部の6部署が受賞されました。

また、Good Job賞では医療行為が行われる前に患者さんとのコミュニケーション等により医療事故を未然に防いだ個人を表彰するもので、第一病棟6階(現入院



棟東7階)小菅恵子看護師(医師が違う患者さんにお薬を処方していたことを発見して投薬誤りを防止し、且つ、本来処方されるべき患者さんの投薬忘れを防止できた事例)、第一病棟7階(現入院棟東4階)玉田翔子看護師(持参薬の再開指示があった患者さんの薬の中に必要な抗血栓薬が入っていないことに気づき、投薬忘れを防止できた事例)、第二病棟3階佐藤真奈美助産師(術前から複数の糖尿病薬が休薬になっていた患者さんについて、術後に内服が再開となった際に再開指示のない糖尿病薬もセットされていることに気づき、中止薬の内服を防止できた事例)、放射線部・光学医療診療部 蛭沢仁代看護師(CTの検査部位について、医師の指示とコメントが一致していないことに気づき、左右間違いを防止できた事



例)、放射線部・光学医療診療部 中田哲子看護師(CTの検査部位について、医師の指示部位と患者さんが付けていた三角巾の部位が合っていないことに気づき、左右間違いを防止できた事例)の5名が受賞されました。

受賞された部署及び個人には袴田病院長から表彰状と副賞が贈呈され、患者さんに対する真摯な取り組みが感謝の投書に繋がっていること、医療安全への取り組みが本院の文化として醸成していること、そして医療従事者の気づきが事故防止に繋がったことに感謝のお言葉がありました。また、これらのことを周囲にも展開することで更に医療安全の推進に繋がってほしいと期待のお言葉もありました。(医事課)

各診療科等の紹介 【検査部】



積極的に
行っています。

業務においては、新規の検査方法の評価・検討と導入のほか、コロナ禍ではPCR検査

検査部は、富田泰史部長、齋藤紀先副部長をはじめ教員5名(併任含む)、臨床検査技師34名、看護師7名、事務員2名の48名が所属し、検体検査として採血、血液、生化学、一般、感染制御の5部門と、生理検査の全6部門で構成されています。年間の検査件数は、毎年約4%の増加が続き、2022年度で検体検査が約350万件、生理検査で約5万件と、前回2006年の検査部ご紹介時の約2倍の件数となり、全国の国立大学病院でもトップクラスです。

2021年には、検査部門(検査部・輸血部・病理部)として国際規格ISO15189を取得し、標準作業書等の文書類の作成、記録と是正処置、検査環境の整備、TAT管理による迅速で正確な検査結果の提供のほか、診療報酬への加算、DPC係数の向上、治験や教員の論文投稿の際における国際基準に則った検査データの提供など、大学病院検査部としての責務遂行に努めています。さらに、2023年6月には品質保証施設認証も取得し、臨床医への検査結果に関するアドバイスサービスも

機器と作業室の整備、抗原定量検査など24時間検査可能な体制を確立し、感染制御センターと協力しながら院内外の感染制御活動にも携わっています。研究・学術活動では、学会やセミナーでの発表や講演、コメンテーターなどのほか、学術誌への投稿、学会理事や評議員などを兼務し、指導的な役割を果たしています。教育活動としては、県内唯一の臨床実習受け入れ施設として、保健学科生のみならず、他の技師養成校からの学生も受け入れています。さらに、他院の技師への超音波検査や感染管理などの検査技術指導のほか、各種認定技師の取得、大学院への進学なども積極的に行っています。

検査部は、これからも迅速で正確な検査結果の提供とともに、的確なアドバイスサービス、検査に関し相談しやすい環境づくりと、患者ファーストな医療の提供を目指し、他部門と協力しながら各診療科の診断・治療に貢献できるよう努めていきます。引き続きご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。(技師長 石山雅大)

小児ねぶた運行(8/1)

津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われました。新型コロナウイルスの影響もあり、弘前大学はここ数年ねぶたの参加ができませんでしたが、今年度は4年ぶりに合同運行に参加し、昭和39年に初参加以来、57回目の出陣を果た



しました。8月1日の合同運行開始前に、附属病院外来診療棟正面駐車場において、小児科に入院中の子供達や保護者、医師、看護師、事務職員等による「小型ねぶた」が運行さ

れました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて、子供達は「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ、津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。(総務課)

先憂後楽

外に出てみよう



副病院長 花田裕之

これまで先憂後楽の師に恵まれ、いろいろなところを訪れる機会をもらってきた。実際に行き一緒に行動して感じ取ることが重要である。奥村前循環器内科教授には循環器センター構想のため、熊本済生会病院、東京女子医大に、アメリカ心臓病協会(AHA)学会中には米国の循環器専門病院を訪れて、すべての病床をICU転用できるシステムと、教育専用棟(毎日BLS、ACLSなどが行われている)を見学してきた。救命センター発足時には帝京大救命救急センターで2週間一緒に診療させていただいた。ハイボリュームセンターでの実際を体験できたことはその後青森県で救急医療に

携わる上で大いに役立っている。今年度浅利前救急教授がおられる北里大学に、救命センターの職員を交代で派遣して、他センターでの診療の実際を体験し、自分たちのレベルも感じてもらい、弘前で救急診療に役立ててもらっている。

昨年は緊急被ばく医療関連で台湾の救急医療に触れる機会に恵まれた。台湾には4基の原発(3基が稼働中)があり、高雄医科大学病院中和医院、台北医学大学、林口長庚記念病院を訪問し、現地の被ばく医療体制を学ぶと同時にこちらからは、実際に被ばく医療に携わった経験について講演した。この過程で台湾の厚労省と救命セ

ンターを見学する機会があり、台湾で始まった救急システムに驚くこととなった。日本では救急医療

情報の共有のため、企業が提供するアプリケーションを使って、救急現場から写真情報を送ったり、心電図を送ったりすることが始まったばかりである。一般的には情報は電話で伝えられる。一方台湾では救急車内の患者モニターの血圧などのバイタル情報、心電図が病院にダイレクトにつながっていた。患者の6ヶ月以内の医療情報(受診歴、薬、カルテ内容)が医師のIDで受診前に閲覧可能であった。救急記録もそのままオンラインで医師、家族、救命士のサインが行われて保存される(日本では救急隊が搬送後複写の紙に記入して医師がサインしている)。これらは電子カルテが統一

され、国民皆保険の保険カードに全ての情報が一元化されていることが大きい。診療情報は逐一厚労省が把握できるため、どの地域にどんな疾病や傷病の偏りがあるかが常に監視されており、感染症のみならず災害発生も随時把握されている。日本でマイナンバーカードが今回の能登半島地震でも個人識別にさえ使えていないのとは雲泥の差である。

附属病院では全ての職種で外国を含めていろいろな施設を訪れて自分たちの診療に活かそうという動きが始まった。いろいろな機会を活かして他施設や他の国から刺激を受けて、よりよい診療に活かしたいと願っている。

国際連携推進WGキックオフ講演会(9/13)



本院は、今年度新たに病院長補佐(国際化担当)のポストを設け、脳神経外科の齊藤敦志教授を置き、医師、コメディカルスタッフ、事務職員など多様な職種で構成される国際連携推進ワーキンググループを設置しました。

9月13日にメディカルスタッフ教育研修センターを共催に加え、医療法人社団KNI北原国際病院の林祥史病院長を講師として招き、キックオフ講演会「大学病院の国際連携の可能性を探る!」を開催しました。

講演会には、袴田健一附属病院長をはじめ、各診療科の医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、臨床工学技士、栄養管理士、事務職員、医学部学生など国際連携に興味関心がある関係者33名が参加しました。

講演では、林講師が病院長として管理運営されてきたカンボジアの病院の取組として、海外に「人」「設備」「システム」などの日本医療をパッケージして、いわば病院丸ごと輸出したことにより日本人医師がスムーズに海外で医療を提供できた仕組みについて紹介されま

した。質疑応答では、医療材料が限られた中での医療提供に関する事、海外でメディカルスタッフが活動する条件、医療従事者の教育コストなどについて、活発に意見交換が行われ、予定時間を超過するほどの盛況でした。

講演後のアンケートでは、慢性疾患を主な対象としている内科医による国際医療活動のニーズや海外での災害医療を知りたい、尿や髄液の鏡検に関して海外医療機関と交流したいといった声があり、ワーキンググループではこれらのアンケート結果を踏まえて、国際連携を推進していきます。

(総務課)

脳卒中・心臓病等総合支援センターの開設にあたって



令和5年8月1日に、厚生労働省のモデル事業として、「青森県・弘前大学医学部附属病院脳卒中・心臓病等総合支援センター」が弘前大学医学部附属病院内に開設されました。本モデル事業は、平成30年に成立した「脳卒中・循環器病対策基本法」が背景になっています。この法律に基づき、政府内で「循環器病対策推進基本計画」が策定され、予防や医療、福祉サービスまで、幅広い循環器病対策を総合的に推進することになりました。令和5年度は、全国から15府県の医療機関が本モデル事業に採択されています。

当センターは、医師、看護師、社会福祉士、理学療法士、薬剤師、管理栄養士、事務員など15名で構成され、他にも院内各部署から協力員として約60名の登録をいただいております。当センターで掲げている活動の柱は、①循環器病の患者・家族の相談支援②循環器病の疾患啓発③医療従事者のネットワーク構築・強化です。相談支援については、当院だけでなく、青森県内すべての脳卒中・心臓病等の患者・家族からの相談(直接来院、電話、メールなど)を無料で受け付けています。患者・家族だけではなく、

医療従事者からの相談も受け付けていますので、お気軽にご相談ください。疾患啓発については、循環器病に関する啓発資料の作成、県民を対象とした公開講座、医師のみならず多職種の医療従事者を対象とした研修会や勉強会を定期的に開催しています。現地参加に加え、WEBでライブ配信もしていますので、知識の向上にお役立ていただければと存じます。さらに、勉強会等を通じて、県内の医療従事者間のネットワーク構築・強化にも取り組んでいます。当センターの活動の詳細ならびに相談などにつきましては、当センターのホームページをご覧ください(<https://www.hirosakinoushincenter.jp>)。

当センターが拠点となり、青森県と密に連携しながら、県全体における循環器病患者・家族のための包括的な支援体制の構築に取り組みます。今後とも皆様のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。最後に、当センターの開設に際しご尽力いただいた全ての皆様、この場を借りて深く感謝申し上げます。

(脳卒中・心臓病等総合支援センター長 富田泰史)

新任科長の自己紹介

内分泌内科・糖尿病代謝内科

科長 藤田 征弘



2023年10月1日付けで内分泌内科・糖尿病代謝内科科長を拝命しました。自己紹介を兼ねてご挨拶を申し上げます。私は兵庫県尼崎市出身です。大学は大津市にある滋賀医科大学を卒業しました。近くには琵琶湖、瀬田の唐橋、紫式部が源氏物語を著した石山寺や比叡山があります。初期研修・大学院・臨床研修(大阪)ののち、カナダ・バンクーバーのUniversity of British Columbiaに4年半留学しました。帰国後、旭川医科大学にも11年間在籍しておりました。滋賀から赴任しましたので「弘前は寒いですよ」と言われましたが、-20℃を下回る旭川に長くいたため、寒さには弘前の

方々より強い?と自負しています。私たちが専門とする糖尿病、内分泌代謝疾患は、総合的に「全身を診る」ことが求められています。とくに糖尿病は全身にわたる多彩な合併症を発症するため、これら合併症を含めた包括的な診療技量が求められます。

残念ながら、青森県は全国一の短命県で、かつ糖尿病患者が多い県です。糖尿病は感染症・悪性疾患・心血管疾患の発症や増悪に深く関わっており、青森県の糖尿病診療を改善することが短命県から脱出の第一歩だと考えております。是非地域の先生には血糖調整の難しい1型糖尿病患者、高度の合併症を発症した患者、妊娠糖尿

病/糖尿病合併妊婦、短期間で急激に血糖が悪化した患者さんなどご紹介いただければ幸いです。さらに、内分泌代謝疾患は、県内で専門医/専門施設が少なく、診断・治療において大学病院が青森県だけでなく秋田県東北を含んだ地域の重要な役割を担っております。下垂体・副腎疾患、難治性高血圧、甲状腺腺症をふくむ甲状腺疾患、電解質異常、高度肥満症などご紹介いただければ幸いです。

診療科をあげて青森県の健康長寿を目指して頑張っていきたいと思います。ご指導、ご支援を賜るようお願い申し上げます。

新任科長の自己紹介

皮膚科科長 赤坂英二郎



令和5年10月1日付で皮膚科の診療科長を拝命いたしました赤坂英二郎と申します。私は岩手県盛岡市出身で、盛岡第一高等学校を卒業後、弘前大学医学部に入学し平成15年に卒業いたしました。医学部在籍中はバスケットボール部に所属しておりました。卒業後は弘前大学医学部附属病院および青森県立中央病院で初期研修を行ったのち、約20年間、主に弘前大学医学部附属病院で皮膚科医として勤務してまいりました。

この20年の間に皮膚科診療は大きく変わりました。皮膚悪性腫瘍に対する手術や抗がん剤や免疫チェックポイント阻害剤を用いた治療が標準的に行われるようになりました。重症の乾癬やアトピー性皮膚炎患者さんも、生物学的製剤を中心とした分子標的薬の登場により、きれいに治すことができる患者さんが増えました。また、他診療科の先生方と協力して診療にあたる機会も増えています。免疫チェックポイント阻害剤の免疫関連有害事象では多くの診療科の先生に治療をお願いしています。高齢化に伴い増加中の皮膚悪性腫瘍ではキャンサーボードを通じていろいろとご相談させていただいております。また、チロシンキナーゼ阻害剤を中心に多くの分子標的薬では皮膚有害事象が効率に生じますし、免疫抑制状態の患者さんは蜂窩織炎や带状疱疹などの感染症を高率に発症しますので、そういった面では当科で皮膚の治療を担当しています。疾患の病態が解明されるにつれて、現代の医療は単一診療科で完結できない場面が増えています。今後も医学部附属病院が一丸となって患者さんに包括的な治療を提供できるよう、その一

つの歯車として貢献していきたいと思っております。

今後も青森県および秋田県北の中核病院として、患者さんやご家族が安心して治療を行うことができるような皮膚科医療体制を確立するため、皮膚科スタッフ一丸となってがんばってまいりたいと思っております。また、私自身も弘前大学医学部附属病院のさらなる発展のため誠心誠意取り組んでまいり所存でございます。今後とも様々な形で各診療科の皆様にご協力を仰ぐことがあるかと思いますが、何卒ご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

新任科長の自己紹介

泌尿器科科長 畠山 真吾



令和5年10月1日付で泌尿器科科長を拝命いたしました。自己紹介を兼ねて就任の挨拶を申し上げます。

私は秋田県八郎潟町の出身で秋田高校から秋田大学医学部へ進学しました。中学校では軟式テニス部、高校はラグビー部(フロンカー)、大学時代は硬式テニス部と軽音サークルに所属しておりました。秋田大学医学部を2000年(平成12年)に卒業し、秋田大学泌尿器科に入局して秋田県で泌尿器科医として勤務しておりましたが、前任の大山力名誉教授(当時秋田大学泌尿器科の講師)に大学院の指導をしていただいたことを契機に、2005年に弘前大学

泌尿器科学講座で働く機会をいただきました。弘前大学附属病院では腎移植やロボット支援手術の立ち上げに参加させていただきました。

2006年から2008年まで、米国La Jollaのバーナム研究所に留学させていただき、基礎研究に漬かった濃厚な2年間を過ごしました。幸いにして、留学中に開発した癌特異的ペプチドは、中性子捕捉療法への応用に発展し、臨床応用に向けて進んでおります。また当科で開発した前立腺癌の新規バイオマーカー:S2、3PSA%検査がまもなく保険収載になる予定です。今後も研究成果が臨床に還元できるよう開発を続けてまいり

たいと思います。

泌尿器科は外科を軸とした腎・尿路・男性生殖器を扱う診療科ですが、慢性腎不全や腎移植を含む腎代替療法も扱うため、総合診療科的な要素も多く含んでおります。そのため「高い専門性」ならびに「広い守備範囲」を併せもった泌尿器科医が求められております。これまで、多くの先生方や医療従事者の方々にお世話になり今の自分があると思っております。今後は、これまでの御恩返しとして、後進の育成と、安全・安心で患者さんに優しい医療に努めてまいりますので、どうぞよろしくようお願い申し上げます。

本町地区総合防災訓練(10/4)

10月4日に本町地区総合防災訓練を実施しました。本訓練は、教職員の災害対策に関する知識・経験・技術の体得と向上、災害時に地域の核となるべく本院の災害医療体制の検証及び災害対策マニュアルの見直しを目的としています。

今年度は災害対策室机上訓練として、青森県日本海側を震源とする地震が発生し、弘前市内で最大震度6強を記録、本院建物の損壊はないものの、停電のため非常用発電機が稼働し、エレベーターは点検完了まで使用不可という状況のもと、プレイヤー側とコントローラー側に分かれ、プ

レイヤー側は災害対策室の立ち上げ、院内各施設の被災状況の把握をして、コントローラー側から与えられる災害時に予想される事案・状況等に対応するため、意思決定や役割行動をとることを計画いたしました。

訓練には袴田病院長、花田副病院長をはじめ、災害シナリオ作成からご協力いただいた災害・被災く医療教育センターの伊藤センター長、辻口助教、日本災害医学

会学生会で活動している本学医学生、看護部、事務部から併せて約40名が参加いたしました。

参加職員からは、「災害が起こった場合に、こういったことが必要か確認することができた」「短時間であらゆる情報や要請が次々と入り対応者は大変だったが非常に良い訓練になった」等の前向きな意見や、「病院内の患者数、職員数、空床、使用できる器材の数など、災害対

策室で報告依頼なしに把握できるようにする必要がある。医療情報端末の活用など」等の今後の課題も確認でき、教職員の防災意識の醸成及び災害時の行動の再確認が図られ、有意義な訓練となりました。

今後、これらの意見を基に、更に実用的な災害対策体制を構築していきたいと考えています。

(総務課)

弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

お名前掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、令和5年8月から令和5年10月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理調達課)

寄附者ご芳名 海老名 冨弥 様
匿名希望 4人

※掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

【編集後記】

この季節、上空から見た青森は雪の白さと木々の黒さが絶妙な水墨画を連想させる。集落が彩りを添え遠くに青い海が見える。あらためて綺麗な土地に住んでいるのだと実感する。能登半島も上空から眺めればおそらくはこのような土地だったのだろう。それが一瞬の震災で自然が消えた。震災は中学生や高齢者の二次避難をも強いた。災害時に一緒にいて助け合うことこそ家族の大切さなのだと思う。それが叶わないもどかしさを憂う。皆様からの原稿を読みながら、穏やかな日常を過ごすことがこんなに尊いものだと思える。

(病院広報委員会 委員長 横山良仁)